

マラヤ北西部における中国人集落の構造（上）

前 田 清 茂

A Chinese Community Structure in Northwestern Part of Malaya

by

Kiyoshige MAEDA

1 は じ め に

マラヤの北西部、ケダー(Kedah) 州の首府アロールスター(Alor Star—東経 $100^{\circ}20'$ 、北緯 $6^{\circ}10'$) から、北西に向って5マイルも行くと、水路沿いに木造の粗末な家屋の密集したアロールジャングス(Alor Jang-gus) とよばれる田舎町に出会う。この町は、周辺に散在するマレー人村落の商業や行政上の中心地であり、ほとんどの住民は、中国系マレーシア連邦国民—以下中国人という—である。

1964年7月から、6カ月間にわたって、京都大学東南アジア研究センターの「マレーシア地域研究班」は、この町に定着して、マレー人村落の集約的調査研究を行ない、同時に、この中国人集落の基本的な調査資料を収集したが、マレー人に対する顧慮と、言語の面での障壁があ

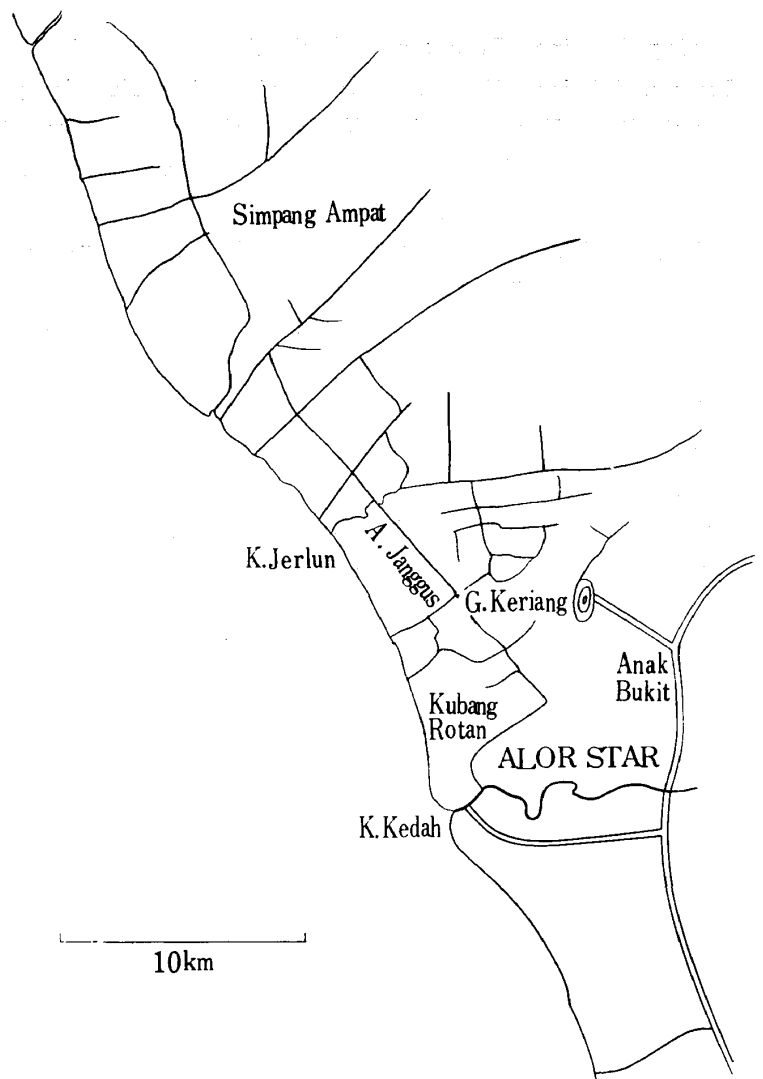


図1 アロールジャングス付近略図

って、中国人集落の調査は、十分には行なわれなかった。中国人と親密な関係を保つことは、マレー人への接近を妨げる1要因であったし、また、平素中国語¹⁾を語る中国人への接近のためには、中国語を話すことが必要であった。

したがって、上記の調査では、中国人集落について、突っ込んだ研究はなされなかったが、1965年の7月から8月にかけて、それを補充する意味において、アロールジャングス中国人集落の補足調査が行なわれた。以下は、その調査結果の概要である。

2 アロールジャングス—中国人集落—の史的背景

アロールジャングスは、行政的には、ケダー州コタスター郡 (Daerah Kota Star) パダンララン区 (Mukim Padang Lalang) の1区域である。しかし、パダンララン区周辺の中心地であり、中国人商店の密集した地域である。したがって、社会的には、1個の独立した単位を構成しているかのようにも見える。事実、中国人とマレー人は、言語、宗教、慣習その他すべての面で、全く対照的な相違を示しているので、両者の文化的、社会的境界は明白であり、また、同じ集落内に一部交錯して居住していても、中国人は、文化的、社会的に1つのまとまりを示している。本論で取扱う内容は、アロールジャングス在住の中国人に関するものである。

アロールジャングスは現地で発行されている極めて詳細な地図、あるいは、華文版マレーシア連邦地図帖でも、その分州図において、僅かに見出されるだけの、まことに小規模な集落である。中国人は、このアロールジ



写真1 アロールジャングスにも、かつては、このような映画館があった。看板中央の星光戲院の文字は、映画館の名称であるが、両脇に立書きで、吉礁州、甘光邐と書いてあるのが、ケダー州、アロールジャングスの中国訳である。この映画館は今では閉鎖されて、世帯番号(60)などの経営する精米所の籾倉庫になっている。交通が便利になって、集落の人達は、設備のよいアロールスターの映画館に行けるようになったからである。

1) 中国人相互には福建語の中の厦門語を話し、教育を受けた一部の者は、北方系標準語 (Mandarin) が話せる。なお、中国人は北方系標準語を国語 Kuo Yü とよぶが、最近では国語とはマレー語のことであるから、華語 Hua Yü と改むべきであるとされている。

ャングスを中国語で甘光暹²⁾ (Kan Kuang Hsien) と呼んでおり (写真1 参照)、鑒光暹 (Chien Kuang Hsien) と書くこともある。これは、甘と鑒が、福建音では同じためである。華文版地図帖がいずれも、アロールジャングスを亜羅章古 (Ya Luo Chang Ku) と表記しているのは、おそらく机上の創作で、現地では一度も見聞したことはない。

では、この甘光暹、ないしは、鑒光暹というのは、Alor Janggus というマレー語の音に近い漢字を当てたものか否かを比較して見るに、近似点はなんらないように思われる。いわゆる音訳地名ではないとすると、意識地名ということも考えられるが、Alor (水のよどむ所、川の弯曲部)、Janggus (うるし科の植物の名称) という意味からして、これも妥当ではない。Alor Janggus と甘光暹の関連を考えていた際に、たまたま、アロールジャングス南方に隣接するクバンロタン (Kubang Rotan) を、中国語で甘光牡丹 (Kan Kuang Mu Tan) と表記してあるのを発見して、甘光暹の甘光は、Kubang すなわち、泥地、水ため、水牛の水あび場の意味であり、残る1字の暹は、Siam、すなわち、暹羅の略で、甘光暹は Kubang Siam クバンシアムのことであることが判明した。このクバンシアムは、アロールジャングスの北西にある村 (Kampong) の名称で、シャムの軍隊が昔、掘った井戸があるといわれ、現在、行政的には隣村に当たるに過ぎない。これは、約65年前、初期に来村した中国人が、クバンシアムにおいて、多くマレー人と小作契約をして働いていた当時に使用していた甘光・暹という地名を、その後、アロールジャングスに移住して来ても、依然流用して、そのまま使用したものと思われる。しかし、マレー語では Alor Janggus といい、中国語では甘光暹と呼ぶ地名呼称のくいちがいは、アロールジャングス中国人集落の形成以前に、この集落周辺へ早期に来村した中国人が、多くクバンシアムに入村したことを物語ると同時に、中国人が、マレー人の地名呼称には超然として、甘光暹という地名を使用していることを示すもので、興味深い。

なお、中国人が外国の地名・人名等を漢字で表記するとき、大部分は音訳、一部は意識によるのであるが、中国の周辺、とくに東南アジアにおいては、中国人が、原名とは別に、中国名を名付けた例も少なくない。しかし、甘光暹のように、隣村名の流用、誤用という例は珍しいものと思われる。参考までに、アロールジャングス附近地名の中国訳の例を示すと、表1のようになる。

アロールジャングスの中国人人口は481名で、性・年令別の人口構成は、表2の示すとおりである。

マレー人は、中老年者はもちろん、若者でも大部分がマレー服を着用しているのに反して、中国人は、ほとんど洋服——といっても平素は、半ズボンにランニング・シャツ、他の市街地へ行くときは、長ズボンに開襟シャツ程度——を着用している。しかし、家庭内では、上半身は裸

2) 本稿において、中国語の発音を表記するときは、ウェード式中国語発音表記法により、4声符号は省略した。

表1 A. J. 附近地名中国訳の例

	中 国 名	原 名	カ ナ 表 記
音 訳	亜 羅 士 打	Alor Star	ア ロ ー ル ス タ ー
	安 南 武 吉	Anak Bukit	ア ナ ブ キ ッ ト
	日 得 拉	Jitra	ジ ト ラ
	尤 兪 侖	Jurun	ジ ュ ル ン
意 訳	甘 光 牡 丹	Kubang Rotan	ク バ ン ロ タ ン
	十 大 海 田 象	Simpang Empat Bukit Mertajam	シン パ ン ウ ン パ ッ ト ブ キ ッ ト ム ル タ ジ ャ ム
	字 山 浜	Tepi Laut	ト ビ ラ ウ ト
	港 脚 区 巴 山	Gunong Keriang (Bukit Gajah)*	グ ノ ン ク リ ア ン
折 衷 訳	吉 打 港 口	Kuala Kedah	ク ア ラ ケ ダ ー
	双 溪 大 年	Sungei Patani	ス ン ゲ イ パ タ ニ
	喬 治 敦 (市)	George Town	ジ ョ ー ジ タ ウ ン
	檳 城 域	Penang	ペ ナ ン
そ の 他	甘 光 暹	Alor Janggus	ア ロ ー ル ジャ ン グ ス
	北 新 路 頭	Butterworth	バ タ ワ ー ス
		Prai	プ ラ イ

註：1. A. J. はアロールジャングスの略

2. ※は俗称

表2 A. J. 中国人性・年令別人口

年 令	男	女	計
0 — 4	36	27	63
5 — 9	42	46	88
10 — 14	43	28	71
15 — 19	29	25	54
20 — 24	17	19	36
25 — 29	13	15	28
30 — 34	18	12	30
35 — 39	8	12	20
40 — 44	5	8	13
45 — 49	7	8	15
50 — 54	9	8	17
55 — 59	7	7	14
60 — 64	4	4	8
65 — 69	7	4	11
70 — 74	3	—	3
75 — 79	4	5	9
80 — 84	1	—	1
85 — 89	—	—	—
計	253	228	481

でいることもあり、1日数度は欠かさない水浴 (mandi—冲涼)の後では、下半身にマレーのサロンをまとうことも少なくない (写真2参照)。そして、家屋も、マレー人の杙上家屋 (高脚房) に対して、中国人の家屋は、すべて、土、またはセメント (紅毛灰) のたたきを床にした平屋であり、また、水路沿いに数軒がひとかたまりになって、長く分散しているマレー人の家屋とは全く対照的に、中国人の家屋は、大体1カ所に密集している。食事についても、マレー人が、主としてカレー粉で味付けした料理や飯を手づかみで食するのに反して、中国人は中国料理を、箸またはフォーク、スプーンを用いて食する。中国人が、マレー人と言葉を交すときには、すべてマレー語を用いるが、中国人相互の場合には、福建語を使用する。アロールジャングスの中国人の大部分が、福建省南部 (閩南) 廈門附近の安溪県出身者であるため、アロールジャングスでは、在住の比較的少数の広東省出身者も含めて、集落内では一般に、福建語の中の廈門方言が使用されている。

福建語には数種の方言がある。葉国慶氏の『閩南方言与十五音』によると福建語は、大別して9語系、細分すると65種に分れる³⁾というが、アロールジャングス世帯番号 (14) の言によれば、福建語には、大別して、南から廈門語、仙遊語、興化語、福州語の4方言があり、アロールジャングスで話されている福建語は、この中の廈門語であって、アロールジャングス在住の中国人の大部分は、福建省南部の安溪、南安、同安の3県出身者であり、これらの県は、いずれも廈門語系区域に属する。そして、上記4語系の中、廈門語と福州語は、あたかも相互に外国語の如く懸隔³⁾して、上記の世帯番号 (14) が、1965年春、両親に会うため帰国し、



写真2 世帯番号(16), 36才, 精米所労働者とその子女。1日の労働を終え、運河で水浴の後、マレーのサロンをまとして、われわれの宿舍へ散歩 (跑跑) に来た風景。彼はアロールジャングスで生れ、育ったので、集落内外の事情は至って詳しい。彼は福建語の中の廈門語を日常語とするが、アロールジャングスの小学校を卒業しており、北方系標準語もかなり話せ、また、漢字も書ける。なお小学校理事でもある。サロンをまとして、マレー語も堪能のようであるが、これは決して中国人のマレー化というべき程のものではなくて、いささか現地の風習をまね、仕事の上の方便のために、現地人の言語を心がけて学んだというまでのことである。彼は連日、仕事後われわれの宿舍に来て、時には深更までアロールジャングス中国人の万般のことについて、教示してくれた。

3) 福建省安溪県生れ、39才、雑貨店店主。郷里において初級中学を卒業、1947年アロールジャングスに来たる。

その機会に各地を遊覧して、省都福州を訪れたときには、同じ福建省内でありながら、厦門語では全く意思の疏通ができず、福建人にとっては外国語にも相当する北方系標準語を使用して、ようやく用件を達し得たということである。

中国人相互間に横たわる、こうした、主として、言語の障壁などの理由によって、東南アジアその他国外において、親戚、ないしは、同郷人がほとんどを占める都会、市街、集落などが発達するのであって、これは、つぎに述べるアロールジャングスの中国人の出身地を見るに当たっても、極めて参考になることである。

表3 A. J. 中国人戸主の生地ならびに中国の出身地

中国の		福建省					広東省					計				
生地	出身地	県名等 村名	安溪					南同福 安安州					台中潮汀海			
													山山州州南			
			仙山山仙	梁												
			都道頭道													
マ生	A. J. 生れ		10	1	2	1	1	—	6	—	—	—	—	—	21	
ラヤレ	その他の		—	3	—	1	—	6	1	1	—	1	①	—	15	
	中国生れ		9	5	2	—	—	3	1	2	4	—	1	1①	—	29
			19	9	4	2	1	9	8		4	1				
	計		35					17		3	5	2	2	1		
			55								10					65

註 1. ○印は客家である。

2. 汀州を広東省あつかいとした。

表3は、戸主のみについて、その生地、ならびに、中国出身地の人数を示したものである。一般に海外在住中国人（華僑）の分類には、出身地や方言が基準とされることが多く、普通、⁴⁾(1)広府幫 (Kwong-fu group), (2)潮州幫 (Teochiu group), (3)客家幫 (Hakka, Kheh group), (4)福建幫 (Hokkien group), (5)海南幫 (Hainanese, Hailam group) の5者に分類することが多いようである⁵⁾ (図2参照)。アロールジャングスにも、極めて少数のものもあるが、この5者はいずれも在住する。しかし、全戸数65戸の中、福建省出身者が55戸、その中でも安溪県出身者が35戸と全戸数の半数以上を占め、圧倒的に多い。福建省安溪県出身者は、数の上で優位を占めるだけでなく、経済的、あるいは、社会的にも極めて優勢であるが、これについては後述

4) 幫 (Pang) とは、この場合、中国人同郷商人の団体、同郷会の意。

5) Skinner, G.: Chinese Society in Thailand, 1957. pp. 35—52.

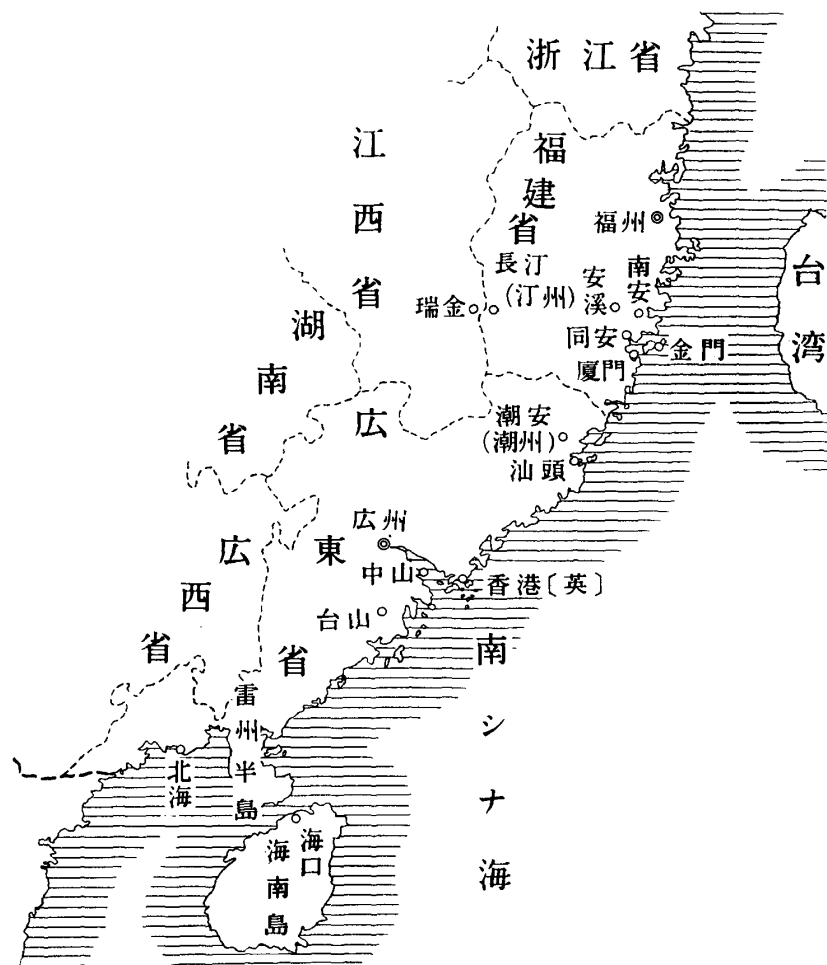


図 2 福建・広東両省略図

する。また、表3による戸主の出生地は、半数以上がマラヤであり、総数の3分の1近くが、アロールジャングス生れである。その意味では、彼らはマラヤ生れの2世と呼ばれるべきものではあるが、しかし、中国人の小学生でも、未だに意識の上では、彼らの父祖の中国出身地を、彼ら自身の出身地と考えている。多くの若者に、出身地を尋ねると、自分は、福建人、あるいは、広東人であるという回答が即座に返ってくる。しかし、当該の省の何県であるかという点になると、とくに広東省出身者は、父母に尋ねて、明日にでも返事するという者が多かった。

かつて中国へ行ったこともない年少者も含めて、福建人、広東人ともに、同郷意識がかなり強いようである。中国人は、表面的には、顧客であるマレー人と談笑しているが、内心では、マレー人を蔑視し、不信感を抱いているものが多い。それと程度の差は大いにあるにしても、福建人と広東人の言語や風俗、習慣の相違に由来する偏見は、随所に散見されるように思う。(写真3, 4参照)。なお、アロールジャングスの中国人には、マラヤ中部の錫鉱山やゴム園からの流入者は認められなかった。



写真 3



写真 4

アロールスターにある中国人墓地は、福建、あるいは、広東省出身者のクラブ（会館）がそれぞれ管理している。福建人墓地は街の西方に、広東人墓地は北方にあり、たがい約7マイルも離れている。アロールジャングスにおいては、現在でも、福建人と広東人の通婚の例は皆無に近いし、墓地に至っては、まず絶対に混同することはない。婚姻と葬儀の面のみから見ても、同様に故国を遠く離れた中国人相互でありながら、何故このように区別をしなければならないものかと、いささか奇異に感じる。そして、同省人の墓地の中でも、墓石の上部にさらに、死者の出身県、出身地を明記している。写真3は福建省南安県出身者のものであり、写真4は嘉応（現在の広東省梅県一東116°、北24°附近）出身者の合同墓である。なお墓石の建立年号も、古いものでは写真4のように清代の光緒（西暦1874年～1908年）年号のものもあれば、民国のものも多い。最近数年の建立にかかるものだけが、写真3のように、民国年号を廃して、西暦年号を使用している。

アロールジャングスの中国人は、そのおかれた環境にも拘わらず、上述のように、マレー人とは文化的、社会的にも全く異なった生活をしており、中国人としての民族意識も甚だ強いものがある。しかし、自分達もマレーシアの公民であり、マレー人と全く同様に、公民としての権利を享受すべきものであるとの考えは、甚だ強烈であり、最近、政府によって行なわれている一連のマレー化政策、例えば、公務員の採用、新規企業の許可、政府補助などにおけるマレー人優先に対しては、異口同音に不平、憤懣を訴える。彼等は一面において、中国人としての強い民族意識をもつと同時に、マレーシア公民としての強い権利意識ももっているのである。

中国生れの者すべてについて、その人口を年令・性別に示すと、表4のようになる。中国生れの中国人は、ほとんど、50才代から70才代の間に分布しており、それ以下にも散見せられる。50才代から70才代の中国生れ中国人には、1910年前後一清末、民国初期のころに、中国、主として、厦門港から出港して、シンガポール、ペナン、アロールスターなどを経て、先に述べたクバンシウム、あるいは、アロールジャングスに來村したことが多い。それ以下の世代になれば、第2次世界大戦の終るのを待って、父の業を継ぐために、あるいは父と交替するために來村し、女子にあっては、妻子を残して出稼ぎに來ていた主人に迎えられて來村したような事例が多い。調査の示すところでは、1949年の共産革命以後の來航者は、2名を数えるのみであ

り、祖国遊覧のための旅行者を除いては、中国本土との来往がほとんどないことが判る。

表5は、中国人の来村順位等を示したものであるが、これによっても、さきに述べたクバンシム、ないしは、アロールジャングスは初期から、ほとんど、福建省南部出身者によって占められていたことが判る。初期の来村者は、もちろん、徒手空拳、無資本であったので、マレー人の小作人となり、あるいは、小資本でもできる行商人として、荷物を担いでマレー

人の村落をまわり、いずれも勤儉貯蓄して、後日のために基礎を作ったものである。中国人が、最初にクバンシム、あるいは、アロールジャングスに来村した正確な年次は、初期来村者の子孫に質問しても、明確な回答は得られなかったが、表5による来村順第8位の世帯番号(26)は、現在生存している者では、来村が最も早いものであり、彼は60年前に来村したという。また、同表、来村順第12位の世帯番号(4)、戸主の父は、現在在世しているものの中で

表4 A. J. 中国人年令・性別にみた中国生れ人口

年 令	男	女
15 — 19	1	—
20 — 24	—	—
25 — 29	—	1
30 — 34	1	—
35 — 39	2	2
40 — 44	2	2
45 — 49	—	1
50 — 54	6	3
55 — 59	6	3
60 — 64	3	2
65 — 69	5	3
70 — 74	3	—
75 — 79	4	3
80 — 84	1	—
計	34	20

表5 A. J. 中国人来村順氏名等

来村順	世帯番号	来 村 者	出 身	来村時職業	現住者戸主の職業	階 層
1	48	父	福建同安	農 業	生 果 店	下
2	4	叔 父	安溪仙都	〃	コーヒー店店主	下
3	91	夫 の 父	福建南安	商 業	無 職	下
4	71	父 父	安溪山道	〃	阿 片 の 店	下
5	42	曾 祖 父	福建同安	農 業	農 業 (小作)	中
6	51	父	〃	〃	農 業 (自作)	下
7	28	叔 父	安溪仙都	商 業	雜 貨 店 店 主	上
8	26	本 人	広東台山	〃	金 舗 店 店 主	上
9	43	岳 父	広東汀州	農 業	藥 屋 店 店 主	下
10	60	父 宗	安溪仙都	商 業	精 米 所 經 営 者	上
11	?	林 文	?	?	?	?
12	4	本 人	安溪仙都	商 業	(来村順2に同じ)	下
13	15	〃	〃	〃	雜 貨 店 店 主	中
14	25	〃	福建南安	農 業	雜 貨 店 店 主	下
15	79	〃	〃	〃	無 職	下

は、来村順は第2位になるものであるが、彼は53年前に来村したという。古老の言を総合すると、最も初期の中国人来村年次は、ほぼ、65年ぐらい以前と推定できるようである。

中国生れ中国人の来村事情及びその後の生活状況などを、2、3概説するとつぎのようになる。

1. 世帯番号(26)、金舖(金装飾品製造、販売業)⁶⁾、79才⁶⁾は、広東省台山県の農家に生れた。家が貧しく、単身ボルネオ——のどこであるかを本人は記憶していない——に出国し、ここで約1カ年居住して、金細工(打金)を習得した。ついで、シンガポール、ペナンなどにおいて、金細工の職人をし、今から、60年前、アロールジャングスに來村した。当初は、資力がなないので、店舖を開くこともできず、マレー人の村落をまわって金細工の注文をとり、自分の家で作製して、代償を受取り、刻苦耐勞、儉約節省して資力を貯え、その間に、土地、家屋を購入して、1930年ごろには、集落でも屈指の財産家、有力者になった。このことは、1929年に創設せられたアロールジャングスの中国人小学校(写真5参照)の数名の募金功勞者に、彼が名をつらねていることによってもうかがえる。彼には、正夫人と第2夫人とがあり、ともに同居



写真5 集落の中央部に中国人小学校がある。正式には、文華学校国民型華文小学校〔BOON HWA National-Type (Chinese) Primary School〕という。もちろん、中国人のみの、中国教育の学校である。教育については、別に述べるが、学校には、日本の小学校と同様、児童の書、画、工作品などを展覧している。写真は毛筆で書かせた、卒業生送別の辞の最優秀のものである。平素は略字、当て字を多く書き、ボールペン(原子筆)を専用する児童も、ここでは、折目正しく作文と習字をした例である。なお、文中、現在の中華人民共和国が使用している略字の例は全くなく、また、中国の古い例にしたがったものか、句読点は一切つけていない。

6) 年令はすべて数え年。

7) 1 relong = 2町5反。

していたが、第2夫人との間に3男があり、1955年ごろ、長男に南部で錫鉱山を経営させたが、それが失敗に終り、約M\$20万の損失を蒙り、その土地60ルロン(1 relong⁷⁾一畝)を売却した。また、アロールジャングスにも、5、6軒の宅地と家屋、その他土地を所有し、元来の金舖と、後に2、3男を中心に兼営した洋貨舖・雜貨店(布類、衣類、その他の日用品、化粧品店)は、繁榮しており、集落の人の評価によると、アロールジャングス第4位の金持ちといわれている。彼の正

夫人は数年前に死去したが、第2夫人とその2男、3男及び内孫7名など14名とともに、楽隠居をしている。彼は来村以来60年、その間に1度も帰国したことがなく、また、少数派の広東人であるためか、アロールジャングスには親戚、姻戚がない。しかし、在世する中国人では最も早期に来村した高令者であり、集落内では数少ない広東省出身者の重鎮ともいえる人物である。

2. 世帯番号(4), 戸主の父, 椰子の実干し(晒椰干), 67才は、福建省安溪県仙都村に生れた。清代の光緒30年代に生れたといっているが、正確な誕生年月日は記憶していない。⁸⁾ 生家は農家で、姉2人、兄1人、弟1人の6人兄弟で、極めて貧困であった。彼より先に、兄が表5による来村順第2位の叔父を頼って、クバンシナムに来ていた。今から53年前、彼が14才のとき、故郷に帰って来た兄につれられて、来村した。後に兄は、父をもマラヤに連れて来たが、父は病のため、ペラ州で死去した。彼の叔父は雑貨店を開いていたが、1930年ころに、中国人は漸次アロールジャングスに集中して居住するようになった。彼はアロールジャングスに移ってから、雑貨店を開いていたが、1952年に失火し、店舗、家屋を全焼したため、その後、恢復し得ない。彼は22才のとき1度帰国したことがあるが、その後、40数年帰国しておらず、また、現在の境遇では、それを望むべくもない。長男は他出し、2男がアロールジャングスで小さなコーヒー店を開き、3男は魚の行商、5男は失業状態であり、アロールスターに嫁いだ嫁の家に寄宿し、アロールスターにある親属団体の九竜堂林姓公会からの奨学金で、高等中学教育を受けさせた6男も、卒業後就職先が決っていない。6男から筆者への最近の来信によると、「人が多すぎるこの社会では、1つの仕事を探すことは、如何に難しいことか。しかし、私は忍耐できる。そして、天が真面目なものを苦しめないであろうことを信じる。現在、私は親戚朋友、四方、八方に依頼して、その返答を待っており、天が私に1つの理想の仕事を与えてくれるであろうことを願っている。」と記している。マレーシアでも、とくに、アロールジャングスのような辺境地区の、しかも、有力者でないものは、現在、非常な就職難に悩んでいることが判る。

そして、彼は67才の老令ながら、マレー人から椰子の実を買い、それを割って中の胚乳を干し、コプラ(椰干)を造る、労多くして、利益の少ない仕事を細々と続け、息子達の零細な収入と合わせて、親子、息子夫婦、孫の17人の家族が生活をしている。彼の仕事は、その外に、孫達の相手をするのであり、話の合う同年輩の友人を訪ねて、よもやま話をするのが日課であり、唯一の楽しみのようなものである。故国には40数年も会っていない実弟が在世しているが、その弟から腕時計1個を送付するよう依頼を受けても、送付してやれないような現況である。

3. ついで、世帯番号(14), 雑貨店経営, 39才, 福建省安溪県仙都村出身は、故郷で初級

8) 彼は、光緒30年代に生れたといっているが、年令が事実67才であれば、光緒20年代のはずである。

中学を卒業し、1947年、日本軍敗戦後の中国国民党統治時代に、アロールジャングスで雑貨店を経営していた実父の業を継ぐため、単身来村した。父は、廈門で移民専用の旅館（客棧）を経営していたが、日本軍の廈門進攻による兵乱を逃れて、シンガポールにいる親戚を頼ってマラヤに来、その後、ペナンを経て、アロールスターに入り、同地において雑貨店を営んでいたが、1942年、日本軍のアロールスター進攻を逃れて、アロールジャングスに来村したものである。彼の父は、妻子を故郷において、単身廈門を脱出したもので、その後、現地妻を娶り、5人の子女をもうけたが、第2次世界大戦後帰国する際には、現地妻及び子女を全員故郷に連れて帰り、現在では、廈門には父と第2夫人とその家族、出身地の安溪県には、正夫人と世帯番号（14）の実弟がいる。正夫人は、かつてマラヤに来たことはなく、父は生活上の必要から第2夫人を娶るに至ったもので、この間の事情は、家族は全員理解している。現在、父が主として、廈門において、第2夫人と同居しているのは、第2夫人の子女が幼いという理由のみによるものである。彼の言によると、父は円満な人格者で、正夫人と第2夫人を平等に待遇し、家中は至ってなごやかであり、彼も第2夫人のことを、母（媽媽）、同じくその子女を弟妹と呼んでいる。実母は、彼の弟が面倒を見ており、食べて、着て、生活して行ける（有吃有穿）ので、アロールジャングスから送金する必要もない。ただ、父母とも老令であり、「いざという時」、電報で2、3日、更に出国手続に約1カ月もかかり、間に合わないため、1965年3月から5月まで、帰国して父母に会って来た。彼は、「父母在、不遠千里来相会」といって、父母に会うために、遠路帰国して、孝養を尽したことを誇らしく語ってくれた。彼の帰国感想談は後述する。

3 経 済 構 造

アロールジャングス周辺に居住しているマレー人のほとんどが、稲作のみを事とする農民であるのに対し、アロールジャングス居住の中国人は、表6、生計担当者の職業が示すように、雑貨店店主をはじめとする小売店店主、精米所経営者、その他、店員、労働者、行商人などが多い。また、表7、個人別職業、表8、家族従業員、表9、集落外への通勤者を見ても、同様のことが指摘される。

アロールジャングス附近一円の水田の中に点在する中国人経営の精米所（米較）と、精米所のあるところ、必ず附随する中国人集落、その集落の店舗の大半を占める雑貨店は、この地方での中国人の経済活動を象徴しているかのようである。

マレー人農民は、さきにも述べたように、全く稲作ができるだけで、例えば、畑野菜さえも作らず、稲がかり取られ、籾になって以後の脱穀、精米、搬出、販売など、この地方唯一の産物である米穀の流通に関することは、すべて、中国人の精米業者あるいは、その他に委ねている。

表6 A. J. 中国人生計担当者の職業

職 業	数	職 業	数
雑 貨 店 店 主	13	魚 露 天 商	1
金 舗 店 主	4	魚 行 商 人	2
精 米 所 経 営 者	3	アイスクリーム行商人	1
薬 屋 店 主	1	に わ と り 行 商 人	1
生 果 店 店 主	1	大 工	2
材 木 店 店 主	1	農 業 (自 作)	2
自 転 車 店 店 主	2	農 業 (小 作)	2
コ ー ヒ ー 店 店 主	4		
仕 立 屋 店 主	1	不 明	1
理 髪 店 店 主	1		
阿 片 の 店 店 主	2	計	65
トラック運送業 (運 転 手)	2		
雑 貨 店 店 員	3		
材 木 店 書 記	1		
コ ー ヒ ー 店 店 員	2		
精 米 所 労 働 者	10		
精 米 所 エ ン ジ ニ ア	1		
精 米 所 ト ラ ッ ク 助 手	1		

精米業者というのは、単に賃搦きのような精米を行なうのではなく、米の仲買い商人をも兼ねているのである。また、雑貨店は、農具、肥料、薬品、衣料、調味料、缶詰食品、塩干魚、菓子類、煙草、石油、「酒類」に至るまで、附近のマレー人農民が簡易な生活を営むのに必要な「雑」なるもののすべてを販売している。逆に言えば、マレー人農民が、生活して行くためには、中国人雑貨店は必要不可欠のものになっている。しかも、マレー人農民は、収穫後の数カ月間を除いては、その日暮しにもならない経済生活を送っているために、これらの中国人雑貨店から物品を購入するに当って、現金では購入し得ず、多くは12月から翌年の1月ごろ収穫される粳による支払いを約束する。言い換えれば、粳を担保にした掛買いをしているのである。掛買いの客は、品物に多少掛値があると気付いても値切れないし、また、購入期から収穫期までの利息も当然加算される。こうして、雑貨店店主は、雑貨を販売すると同時に、粳の買い付け業をも兼営したことになり、精米業者の前衛となっている観がある。

雑貨店店主は、長年マレー人農民と接しているから、マレー農民個々の信用度、生計や収穫の状況を熟知しており、支払い可能と認められる限度内において掛売りを行ない、時としては、金銭の融資まで行なうものもある。また、信用度の低いマレー人に対しては、物々交換方式によるか、確実な保証人を立てさせるとか、あるいは、土地証書 (land title) などを抵当物件とし、納入させている例もあるということである。

雑貨店が商品の卸価格と小売価格との間の利潤を得るだけの、単なる小売商にとどまるもの

表7 A. J. 中国人個人別職業

職 業	男	女	職 業	男	女
雑貨店店主	14		精米所経営者	2	2
金舗店主	4		精米所書記	1	
薬屋店主	1		精米所エンジニア	1	
生果店店主	1		精米所トラック運転手	1	
材木店店主	1		精米所労働者	15	
自転車店店主	2		魚露天商	1	
トラック運送業(運転手)	2		魚行商人	5	
コーヒー店店主	3	1	鶏行商人	1	
仕立屋店主	1		その他の行商人	2	
理髪店店主	1		やしの実干し	1	
洗濯屋店主		1	日雇い	2	
阿片の店店主	2		新聞配達	2	
雑貨店店員	18		大工	3	
金舗店員	4		農業(自作)	2	
生果店店員	1		農業(小作)	2	
材木店店員	2		家事		70
自転車店店員	1		無職	9	52
コーヒー店店員	3		不明	2	
仕立屋店員	1				
中学校教員	1				
精米所トラック助手	2		計	117	126
					243

(註：14才以上，ただし就学者を除く)

表8 A. J. 中国人家族従業員

職 種	男	女
雑貨店店員	10	0
金舗店員	3	0
材木店店員	1	0
仕立屋店員	1	0

であるならば，アロールジャングスはもちろん，附近集落を含めて，中国人の繁栄はあり得ないと思われる。

収穫期になると，雑貨店店主は，精米所の労働者などを臨時の手伝い人として，梘（ます，中国語では一斗⁹⁾）と麻袋を携えて，マレー人農家へ粃取り（量穀，もみはかり）に行く。雑貨店への支払いのために，マレー人農民が粃を売却して，現金を持参するのでもなければ，粃を自分で量って持参するのでもない。例外なく，雑貨店の店主がマレー人の農家へ出向いて，「持参」の梘で，「自分」が量るのである。粃を量ることについて，これ以上立入った説明は，差さわりがあるので，あえて，行なわないことにする。

また，マレー人農民は，粃を計量するとき，ガンタン（gantang⁹⁾一斗），160ガンタンをもっ

9) 1 gantang=2.5 升。

表9 A. J. 中国人の集落外への通勤者

世帯番号	年 令	通 勤 先	職 種
16	32	Kubang Rotan	精 米 所 労 働 者
22	22	〃 〃	精 米 所 ト ラ ッ ク 助 手
49	53	〃 〃	コ ー ヒ ー 店 店 主
〃	26	〃 〃	精 米 所 ト ラ ッ ク 運 転 手
〃	23	〃 〃	精 米 所 ト ラ ッ ク 助 手
〃	17	〃 〃	精 米 所 雑 工
50	47	〃 〃	精 米 所 労 働 者
51	20	〃 〃	〃 〃
52	53	?	〃 〃
54	40	?	〃 〃
55	39	Alor Star	材 木 屋 書 記
74	51	Simpang Empat	精 米 所 労 働 者
86	19	Alor Star	中 国 人 中 学 校 教 師
85	18	〃 〃	新 聞 配 達
88	17	〃 〃	〃 〃

て1 クンチャ (kuncha—車) とする如く容量を用いるのに対して、中国人が粳を取引きする時には、¹⁰⁾ 斤、担などと中国の重量による。容量から重量への換算に当って、良質の粳であれば1 クンチャで670斤、普通粳で620斤くらいの重量があり、不良のものでは600斤、580斤のものもある。この粳の品質を鑑定し、容量から重量へ換算して粳の価格を決定するのも計数に明かるい中国人に主導権があるようである。

これに加えて、雑貨店店主の若干の者は、収穫が終ると間もなく、マレー人農民と、前金支払いによって小作契約を結ぶ。これは、私的な契約ではなく、区長 (penghulu) の事務所で、貸借当事者が公的な契約を取交わす (立合同) ものであり、1 カ年1 ルロン当り、M\$ 100 程度が、その一般的な契約相場である。これは、マレー人相互での小作料が1 カ年1 ルロン当り、粳による後払いで M\$ 70 くらいであるのに比べて、割高になっている。1 カ年契約のものもあれば、長期のものでは、10年くらいのももあり、10年期間のものになると、1 ルロン当り、M\$ 800 程度にまで下るとのことである。小作契約を結んだ雑貨店店主は、マレー人農民を雇傭してすべての耕作、収穫を行ない、その間の利益を得るのである。

以上のような雑貨店の多角的経営は、雑貨店をいよいよ有利な企業にし、中国人は、まとまった資本を得ると、先ず雑貨店を経営するという傾向を生んできた。

アロールジャングスの中国人の小売商の中で、雑貨店について多いのは金舗である。金舗とは、金装飾品製造、販売業というべきものであって、金の指輪、ブローチ、ネックレス、腕輪などを製造、販売する。附近のマレー人は、装身具として、黄金のみを尊ぶ傾向があり、白

10) 1 斤 = 600 g, 160 匁。

金、宝石の類を身につけているのは見かけたことがない。金舗関係者の言うところでは、白金は銀と見まちがえられるので価値がなく、一般に好まれないとのことである。また、マレー人にとっては、金装飾品を購入することは、自らを装飾するばかりではなく、金の換金性が高いため、同時に貯蓄の役割も果し得られ、出費の必要があるときには、簡単に売却できる利便もある。

金の純度は、純金、22金、18金、14金と称して判らないこともないが、普通、純金（足金）、9割金（文成金¹¹⁾）、8割金と表示することが多く、8割金からは、ずっと下って、3割5分金というようなものまであり、マレー人農民の大きいネックレスなどは、この種の金含有量の極めて低いものが多いということである。

アロールジャングスには、公認の質屋はない。しかし、中国人の金舗は自己の店舗の製品には固有の刻印をおし、かつ、販売に当っては証明書も添付して、持主が金銭を必要とするときには、自己の店舗の製品に限り、価格の13%引きで、買いもどしを行なうことにしている。このようにして、金舗もまた、金の小売利益にとどまらず、加工賃金、買いもどし再販売など、多角的な収益を得ていることがわかる。

海外在住中国人の職業は、通常、その出身地などによって概略区分することができるとされているが、アロールジャングスにおいても、ほぼ、同様のことが言い得る。居住者の多くを占める福建省南部出身者は、多く商人的であり、先にのべた雑貨店店主、店員および精米所経営者、労働者はこれに属する。広東省出身者の中の、海南島出身者は、接客業、飲食業などに従事するものが多いと言われているが、アロールジャングスにおいては、1戸のみの海南島出身者が貧弱なコーヒー店を経営している。広東省中部出身者は、職人的であるとされているが、アロールジャングスにおける4戸の金舗店主は、1戸が広東省北部出身者であるのを除いて、他の3戸は、いずれも、この地方の出身者であり、ただ1戸ずつの理髪店、洗濯屋も同様、広東省台山県出身者である。また、客家出身者には、薬屋を開くものが多いとされているが、アロールジャングスでただ1戸の薬屋は、汀州¹²⁾出身の客家である。

一般にマラヤでは、中国人は裕福であり、マレー人は貧困であるといわれているが、少し立入って、中国人の経済生活を見ると、アロールジャングスには乞食こそいないが、日々の飯米にも頭を痛めるほどの家族もなくはない。アロールジャングスで、最も裕福と見られる家族は、村人の意見を総合すると、つぎの5戸である。

順位	(世帯番号)	家の職業
1	(60)	精米所経営

11) 文は蘇州碼字という中国の特殊な数字で9を表わす。成は日本語の割に当る。文成金は $\frac{90}{100}$ 金、9割金のこと。

12) もと広東鎮、現在の福建省長汀県附近8県の旧称(図1参照)。使用語は、広東語に近く、アロールスターにおいても、広東人としてあつかわれている。広東暨汀州会館とは広東人と汀州人のクラブのこと。

2	(18)	雑貨店店主
3	(28)	雑貨店店主
4	(26)	金 舗
5	(21)	雑貨店店主

なお、この5戸は、いずれも自家用車を所有している。

また、ある中国人に、アロールジャングス中国人全戸の階層評価を上、中、下の3区分に分類してもらったところ、表10、生計担当者を職業別に見た階層評価に示す結果を得た。アロールジャングス中国人65戸の中、上位に格付けされている家族は、上記の5戸に、世帯番号(61)の精米所経営者(株主)を加えて6戸であり、その内訳は、雑貨店店主3、精米所経営者2、金舗店主1になる。

表 10 A. J. 中国人生計担当者を職業別にみた階層評価

職 業	評 価		
	上	中	下
精 米 所 経 営 者	60, 61		75
雑 貨 店 店 主	18, 21, 28	1, 3, 14, 15, 27 35, 37, 45, 47	25
金 舗 店 主	26	22, 46	40
そ の 他 の 店 主		33, 44, 68	2, 4, 12, 20, 38, 39', 43, 48, 71, 94
トラック運送業運転手		77	88
農 業 店 員		42	51, 69, 84 49, 53, 55, 82, 85
精 米 所 労 働 者			16, 50, 52, 54, 60, 62, 66, 74, 79, 86, 91
精 米 所 トラック助手			92
行 商 人 (含 露 天 商)			24, 57, 70, 72, 73, 80
大工およびその他の労働者			76, 81
不 明			71'
計	6	16	43

註：数字は世帯番号を示す

また、中位に格付けされているものの中でも、雑貨店店主と金舗店主が絶対的多数を占めている。これによって、さきにも述べたように、精米所、雑貨店、金舗の3職業が、アロールジャングスにおいては、圧倒的に有利なものであることがうかがえる。

下位において、特に目立つのは、その他の店主、精米所労働者および行商人である。その他の店主というのは、例えば、コーヒー店(中国語では咖啡店—喫茶店)、自転車店、薬屋などを指すものであるが、これらは、貧弱ながらも店舗があるため、ここでは、やむなく店主と記しているが、実態は、屋根のある、定着した露店というべき程度の、貧弱な店舗に過ぎない。

精米所労働者は、仕事歩合による極端な能率給の日給であるが、普通の米運搬人（米かつぎ）で、1カ月実働20日程度で、月収 M\$ 150~170 であり、収穫期になると、臨時収入をふくめて、M\$ 400 前後の収入があるという。そして、農業従事者が、自作、小作を通じて、いずれも10ルロン（約2.5町）位の水田を耕作しているにもかかわらず、1戸の中位を除いて、他はいずれも下位に格付けされているのは、マレー人の10ルロン耕作農家といえど富農に近いとみなされるのに対比して、きわめて対照的である。

なお、表10は、中国人家族の経済的地位を総合的に検討して、相対的に格付けをしたもので、各戸の財産、および、金銭収入に対する家族数などを厳密に計算して作成したものではない。しかし、これによって、全戸数65戸の中、上位と評価されたもの僅かに6戸に対し、下位と格付けされたものが43戸もあって、マレー人との対比においては、中国人は一般に裕福であるとはいい得ても、中国人内部では、相当の貧富の差があり、かつ、貧者の数が圧倒的に多いことがうかがえる。

また、中国人は貧困者であっても、家族、よそに家庭をもっている兄弟、姉妹および親戚、姻戚の継続的、あるいは、臨時的な相互協力に加えて、当該家族の克己心、勤儉などによって、極端な困窮者は少ないように見受けられた。

表11、宅地・家屋の所有状況は、宅地・家屋の所有者、ならびに、借用者を世帯番号別に示したものである。表10において上位に評価された最も裕福と見られる者でも、必ずしも宅地と家屋を自分で所有しているとは限らない。例えば、さきに最も裕福なクラスと評価された世帯番号（21）は、来村して45年になるにもかかわらず、未だに宅地はもちろん、家屋さえも他人のものである。また、同様上位の、世帯番号（28）、（60）、（61）は、家屋だけ自己所有であり、宅地は他人のものである。そして、その家屋も決して、永住のために作られたという程のものではない。これによって、アロールジャングスの中国人の故郷に対する愛着、送金、錦衣帰郷を望む習性などが、出稼ぎ地において、強いて不動産を取得しないという、こうした結果をもたらしたものと推測できるようである。

しかし、世帯番号（48）と（86）が、現在の階層評価が下であるにもかかわらず、父の遺産である宅地・家屋をかなり所有し、世帯番号（28）が自己の住む宅地・家屋の外に、4軒分の宅地・家屋と1軒分の宅地を所有しているのが特に目立つ。これは世帯番号（48）の父、福建省同安県出身が最も早く当地に来た中国人とされており、世帯番号（86）の父が来村順第4位¹³⁾であり、また世帯番号（26）が来村順第8位で、現在在世する中国人の中では、最も早期に来村した中国人であることを考慮に入れると（表5参照）、以前は、土地の取得も容易であり、永住の決意をもったものは、不動産の取得にも配意していたのではないかと考えられる。

13) 表5においては、来村順第4位の世帯番号は（71）になっているが、（71）は（86）の兄。

表 11 A. J. 中国人宅地・家屋の所有状況

家屋 所有者	自 己 所 有	18	26	28	35	42	45	48	51	77	86	ア ロ ー ル ス タ ー の 女 地 主	ア ロ ー ル ス タ ー の 中 国 人	Syed Hamid	Hj. Ramli	そ マ の レ 他 の 人
自 己 所 有	18, 26 35, 42 45, 48 49, 50 51, 68 69, 71 75, 77 86															
18	15, 16	14														
26	22		(20 21 23 24													
28				27												
35					60'											
42						43	46									
45																
48	37, 44 47							(38 39' 40								
51	52, 53 54															
77										(74 76						
86	25, 85 88, 91										92					
アロールスターの女地主	79, 81 82, 84											80				
アロールスターの中国人	70, 71'												(72 73			
Syed Hamid	60, 61	(55 57												(62 66		
Hj. Ramli															(1, 2 3, 4 12	
その他のマレー人	28															94

註：数字は世帯番号を示す

しかし、現在では、裕福なものの中には、財産はなるべく金、または紙幣¹⁴⁾で所持し、機会があれば、アロールスターのような生活環境のよい市街地に移住しようという考えが強い。例えば、アロールジャングスの中国人の中で、最も裕福なクラスであると言われている世帯番号(18)と(60)は、実兄弟であり、数年前まではその長兄も含めて、3兄弟がアロールジャングスに居住していたが、長兄は商業の関係で数年前にアロールスターに転居し、2男である世帯番号(60)も、アロールジャングス、アロールスターおよびアイエルヒタム¹⁵⁾(Ayer Hitam)

14) かつての中国では、紙幣の信用度は非常に低かったが、マラヤではその信用度は極めて高い。

15) アロールジャングス北方約7マイル。

（15）の3個所に精米所を経営するなどの要務をもち、自家用車で、午前中はアロールスターに、昼食はアロールジャングスに帰り、午後は、また、アイエルヒタムへと車を走らせるのが彼の日課になり、アロールジャングスを起点として、彼の活動は南北に巾広い。

また、世帯番号（26）の2男も、数年前に、アロールスターにおいて、貸店舗をみつけたが、最終的には価格の点で移転は実現に至らなかったという。彼の家は、銀行にさえ信をおかず、家の中に現金を貯わえ、平素でも日没早々には戸じまりをし、警備用も兼ねて、常に2丁の猟銃を常置している程である。

アロールジャングスには現在のところ、上水道もなければ、¹⁶⁾ 一切の娯楽施設もなく、電燈は、私設の発電所から夜間のみ燈火用として僅かに供給されるに過ぎない。一方、商業の面においては逆に、道路の開通、交通機関の利便によって、アロールスターへの吸収が顕著になりつつあるので、有力者の離村の傾向が今後一層強くなるのではないかと考えられる。

アロールジャングスでは、中国人でも、もはや職業を得ることが容易ではなくなった。中国人の子沢山¹⁷⁾に加えて、近時、政府の行なう一連のマレー化政策の推進によって、先にも述べた

表 12 A.J. 中国人無職の性別・年令別

年 令	男	女		計
		無 職	家事従事	
1 5 — 1 9	1	23	1	25
2 0 — 2 4	2	7	11	20
2 5 — 2 9		2	13	15
3 0 — 3 4	1		13	14
3 5 — 3 9			12	12
4 0 — 4 4			7	7
4 5 — 4 9			7	7
5 0 — 5 4		3	4	7
5 5 — 5 9	1	5	2	8
6 0 — 6 4		4		4
6 5 — 6 9	1	4		5
7 0 — 7 4	1			1
7 5 — 7 9	1	4		5
8 0 — 8 4	1			1
計	9	52	70	131
		122		

16) アロールジャングス中国人の中で、世帯番号（26）だけがテレビを備えている。ただし、電気は夜だけ供給されるので、昼間は視聴できず、チャンネル（播帯）数は1つだけ。テレビは日本製。一般家庭には、トランジスタラジオが普及している。

17) 例えば、世帯番号（14）は39才で8人の子女があり、将来も産児制限（節育）などしないと言い、また、世帯番号（26）の2男は33才で5人の子女があり、生んでおけば何とかなると楽観している。なお、アロールジャングスにおいては、避妊薬、避妊器具などの販売は見当らなかった。

ように新規企業の許可、公務員の採用等において、中国人は、マレー人に比して、かなり不利な立場におかれたため、中国人の職業、就職難は現在でも、相当厳しいものがある。アロールジャングスの青年の中、1965年12月に2名が中国系の高等中学を卒業したが、卒業を控えた8月末ごろにおいても、2名とも就職の見当が全くついていない状況であった。

表12は、無職の性別・年令別（女性の家事従事者を含む）人員を示している。この表の示すところによれば、まともな職のない者は、24才までの独身の女性と、55才以上の男女に多いことが判る。だいたい、女性は55才、男性の場合は、65才ぐらいから隠居しているように見受けられる。さきに、学校卒業者の就職難のことを述べたが、それでも、無職の若年者の数は、マレー人の場合に比べて、はるかに少ない。マラヤでは、中国人の勢力が比較的弱いとされているケダー州においても、民間の企業はほとんど中国人の手中にあって、現在のところでは、就職の熱意があり、条件の高望みさえしなければ、なんとか職業にありつき得ることを示している。

表13は、アロールジャングス中国人の集落以外の地での就業状況を示したものである。アロ

表 13 A. J. 中国人の A. J. 以外の地での就業状況

世帯番号	戸主との関係	年令	性	就 職 地	職 種
4	弟	25	男	Alor Star	自動車運転手
22	息子	24	〃	〃	家具屋書記
〃	〃	23	〃	〃	鍛冶屋職人
〃	〃	20	〃	Gurun	自動車修理工
26	〃	41	〃	Butterworth	金舗（下請）
23	〃	38	〃	Ayer Hitam	精米所機械工
39	〃	32	〃	Alor Star	左官
39'	娘	19	女	〃	女中
〃	息子	17	男	〃	コーヒー店店員
48	〃	42	〃	〃	アイスクリーム行商
〃	〃	31	〃	〃	精米所トラック運転手
〃	〃	22	〃	〃	材木店労働者
52	〃	23	〃	Ayer Hitam	コーヒー店店員
60'	娘	16	女	Alor Star	女中
〃	息子	15	男	〃	不明
〃	娘	13	女	不明	不明
69	息子	22	男	Alor Star	学校書記
71	〃	39	〃	〃	不明
74	〃	15	〃	〃	書店店員
91	〃	34	〃	〃	建築商株主
〃	〃	27	〃	Bukit Mertajam	ラジオ・テレビ修理
〃	〃	21	〃	Alor Star	左官
〃	〃	16	〃	〃	雑貨店店員

註：未だアロールジャングスに生活の根拠地を置くもののみ

アロールジャングスからよそへの通勤者については、表9に示した。学校を卒業すると若者は外部に職を求めて出稼ぎに行かなければならない。表9のアロールジャングスからの通勤者の中には、中年層の者が散見され、通勤先は、アロールジャングスに隣接するクバンロタンが圧倒的に多く、その職種は精米所労働者及び精米所のトラック運転手、助手などが多かった。

これに反して、表13に示す出稼ぎ人の場合は、若年者がほとんどを占め、出稼ぎ地は、アロールスターが圧倒的に多く、その職種については全く区々である。

アロールジャングスから僅々5マイルの距離にあり、バスに乗れば30分程で通勤可能なアロールスターに、ほとんどの若者が住み込みをしていることは、現地の雇用慣習、および、初級中学卒業者で、1カ月約M\$70程度の収入では、アロールジャングス←→アロールスター間、1往復90セントの通勤費が割高にすぎるとは思えないかということも考えられるが、このことは、同時に、アロールジャングスでは、家族員収容能力が飽和点に達していること、および、若者が都会地に憧れ、他出したがる傾向を示しているように思える。

アロールスターの中国人商店などは、顧客のマレー人が金曜日にイスラム寺院に参拝し休業する風習に従って、毎週金曜日を休曜日と定めているものが多く、アロールスターで就業しているものは、休曜日にはアロールジャングスに帰ってくるものが少なくない。しかし、この場合でも、家庭をもっているものは、木曜日の勤務が終ると早々に帰宅して、土曜日の朝出勤して行くものが多いのに反して、独身者は、金曜日に帰って来ても、父母に会うと午後には早々にアロールスターへ帰って行く例も見受けられた。

なお、マレー人がアロールジャングス地域から外部に職を求めて出稼ぎする場合は、他の村落地域に分散して、農業に従事するものがほとんどである。

従前は、僅かに水路によって、アロールスターという州首府に連なっていて、ほとんど隔絶したようであったこの小集落は、1955年に村人によって造られた巾約5メートルのアロールスターに通じる旧道路、更に1965年9月に、政府によって、アロールスターからアロールジャングスを通って北接する Perlis 州の首府 Kangar に通じ、北上してタイ国に連なる高速道路が完成せられたことによって、この集落の、附近村落に対して占める経済的地位は、現在、徐々に変貌をなしつつあるといえよう。（続く）

最後に、この報告稿を作成するに当って、1964年度「マレーシア地域研究班」によって収集せられたアロールジャングス中国人調査資料を縦横に利用、また、口羽益生、坪内良博、前田成文「マラヤ北西部の稲作農村」『東南アジア研究』第3巻第1号、1965年6月を参考にさせていただいた。

さらに、今回の現地での調査より、帰国後の資料整理に至るまで、竜谷大学助教授口羽益生氏、ならびに、京都大学東南アジア研究センター研修員坪内良博氏に、一貫して、全面的に御指導、御援助いただいたことを特に記し、衷心からの謝意を表したい。

現代中国語——北方系標準語——を専攻する筆者が、とにも角にも、この地域調査報告をまとめ得るに至ったのは、全く上述の幫助によるものである。